

林修

Osamu Hayashi

東進ハイスクール・東進衛星予備校 現代文講師

大学受験予備校の講師として授業を行いながら、その合間にテレビ出演なども精力的に行っている林修さん。新卒で就職した銀行をわずか五カ月で退社、借金返済のために予備校に勤め始めた……という異色の経歴の持ち主だ。失敗も経験して培った物事の捉え方から、今の教育や若者をどう見るか。競争社会である現実を直視させない公教育に対する苦言から、厳しい世の中を生き抜くために必要な「考える力」を身につけることまで、幅広く語っていただいた。



競争社会の現実を直視して生きぬけ！

可能性を一つずつ消しながら 予備校講師となる

——林先生は平成元年（一九八九
年）に東大法学部を卒業後、最
初は日本長期信用銀行（略称「長
銀」。現在の新生銀行）に就職さ
れていますね。

林 僕はシンクタンクが第一志
望だったんです。長銀を選んだ
理由は、当時、経済学者の竹内
宏さんがいらっしやった長銀総合
研究所に行きたかったからです。

就職活動では政府系金融機関
や都市銀行も回りました。日銀
さんにはあつまり一発で落とさ
れましたけれど……。僕は授業
よりも雀荘に入り浸るような、
不真面目な学生でしたから、当
然ですよ。それでも、他のシ
ンクタンクと長銀から内定をい

ただいて、迷った結果、長銀に
行っただけです。

——「著書やテレビ番組での発
言で、私が印象に残っているの
は、林先生がこれだけ時の人と
なっても「自分の職分はあくま
で予備校講師」「こんなブームが
いつまでも続くわけがない」と、
冷静に見ていらっしやること
です。ご自身に関する客観的な視
点を、どんなきっかけや経験か
ら身につけたのでしょうか。

林 客観的に自分を見ていると
か、特に意識したことはないで
す。でも、バブルの時代に大学
生から社会で働き始めたころを
過ごした経験は、人生の土台を
築くに当たって、決定的に大き

い影響があった気がします。自
分は何でもできるとか、人生は
どうにでもなる、といった甘い
考えが骨の髄まで染み込んで、
そんな状態で長銀に就職したん
ですね。ところが、長銀に入る
とすぐ、雰囲気違和感を覚え
ました。「これはおかしい」と。

——銀行で何がおかしいと感じ
られたのでしょうか。

林 やはり皆がバブルで熱く
なっていて、無限に経済が膨張
していくような想定で融資を
行っていたところなんです。「日経平
均五万円は堅い」という話すら
されていて……。それはどう考
えてもおかしい。過去の歴史を
見ても、経済は必ず循環し、好
況と不況を繰り返すものです。
僕は法学部出身でしたが、経済
を真剣に勉強していたので、い

ろいろ理論的に考えたときに、
日経平均五万円なんていうシナ
リオは成り立たない。好景気（バ
ブル）の山に到達したときの谷
は、一体どれくらい深いのか。
それを考えたなら、いつかクラッ
シュするぞと。「ここはとりあえ
ず離れよう」と思っ、銀行を
辞めたんです。

——その後、どうされたのです
か。

林 経営コンサルタントや輸入
会社など、友達が起業してやっ
ている仕事を手伝ったり、投資
顧問会社を知り合いと一緒につ
くってみたいもしました。

——そのような起業家の方々と
の仕事を林先生はどう感じられ
たのでしょうか。

林 実は、あまりおもしろくな
かったんです。起業や会社経営



はやし・おさむ●1965年、愛知県生まれ。私立東海中・高を経て、東京大学法学部卒業。日本長期信用銀行（現新生銀行）に入行後、5カ月で危機感を抱いて退社。その後、27歳で東進ハイスクール・東進衛星予備校の現代文講師になる。現在、東大・京大コースなどの難関コースを中心に授業を行い、抜群の合格実績を誇る同予備校の躍進に貢献。また、同予備校のテレビCMで放送された「いつやるか？今でしょ！」のセリフで、2013年のユーキャン新語・流行語大賞を受賞。テレビ番組の司会や講演など、予備校講師の枠を超えた活躍を続けている。著書に『受験必要論——人生の基礎は受験で作りが得る』（集英社）、『林修の仕事原論——壁を破る37の方法』（青春出版社）、『林修の「今読みたい」日本文学講座』（宝島社）などがある。

に向いているのは、仲間と一緒に熱くビジョンを語ったり、他人を巻き込んだりするのが、すごく楽しいというようなタイプだと思います。ですが、僕はそうではない。

大学を適当に過ごして社会に出てから、自分は何ができないかということがようやく分かってきたんです。日本全体がバブルに浮かれたように、自分は何もできないと思っていたけれど、才能の無さを思い知った。自分

の可能性が一つずつ消えていき、人生はどうにでもなるという錯覚から脱していきました。——その後、予備校講師の仕事をどのようなきっかけで始めたのでしょうか。

林 もともと学生時代からアルバイトで講師の仕事をしていました。アルバイトの中心は家庭教師でしたが、友達の代行で予備校や塾で教えると、「来週からは君が来てくれないか」とその責任者から、必ず言われたん

です。

そこで、起業した会社の雲行きが怪しくなり、借金も背負ったときに、昔うまくいった仕事でお金を返そうと思い、予備校でアルバイトの講師を始めました。これがまた、どこでもうまくいったんですよ。やはり、人には向き不向きがあるということでしょうね。僕は、努力して、教える仕事がうまくなったとは思わないですから。

——予備校講師は林先生にとって天職だったと。

林 そう思ったことはないんで

自分の頭で考える力を付ける

——そんな林先生はどんな授業をされているのでしょうか。自分の昔の経験では、予備校というと、問題を解くテクニクを伝授する場というイメージがあります。

林 僕はそういうテクニクを伝授して終わりといった授業は一切しません。こうやったら問題が解けるよという手順を示します。しかし、その解き方

す。自分の可能性が消えていくなかで、唯一残った、適性を感じる仕事をしているだけです。人間というのは、できることが本当に少ないんだと思います。自分のできることを選ぶのか、やりたいことにこだわることか。僕の場合はやりたいことを優先しません。やるべきこと、俗な言い方をすれば、自分が「勝ちやすい」ことを選ぶ。そんな感覚を得たのは、いろいろ失敗もして、可能性が消えていく経験をしたおかげだと思います。

を「はい」となぞるのは勉強ではありません。昔、講師をしていた数学を例にとれば、公式を覚え、出題にうまくあてはめるテクニクを学ぶことが勉強ではなく、公式の導出過程をしっかり学び、なぜそれが公式であるかを考え、理解するということが勉強です。それは、抽象的な概念を整理・創出する能力を育てることです。

そうした勉強を生徒に促すため、授業でいつも強調することは「僕の言うことなんか素直に聞く必要はない」ということです。生徒は僕の話の話を絶えず批判的に捉えて、納得する部分があれば受け入れて使ったらいんです。そんな姿勢で自分の頭を使い、自分流の勉強法を見つけていることが大事だと教えています。

—— 大学を卒業して、即戦力と

日本の学校教育について

—— 日本の学校教育については、どう見ていらっしゃいますか。

林 僕のような門外漢が言うのは失礼でしょうが、今は「思いやりを持って、みんな一緒に」といった「非競争のすゝめ」が重視されています。「思いやりを持つ」こと自体は何も間違っていないと思います。しかし、なぜ思いやりを持たなければいけないかといったら、現実の社会は、本質的に競争社会であり、優勝劣敗は避けたいが、それだけでは社会は維持されないというこ

して仕事ができる人は少ないと言われます。自分の頭を使えない、考える力を身につけていないからだと思います。

林 おっしゃるとおりです。僕の授業の目的は、生徒に「考えるヒント」を与えること。そこから生徒が自分だけのやり方を探していったってほしいと思っています。

とが挙げられます。そのことを看過して「みんな一緒に」という平等性のみが強調されます。現実社会をきちんと示し、そのうえで、勝者が敗者を思いやる大切さを教えるべきだと思います。ただ、これからも公教育の現場はそう大きく変わらないと思います。なぜならば、先生自身に競争体験が不足しているように思うからです。アメリカのように、先生以外の職業経験のある現実社会を知っている先生を増やしていく必要があります。

「自己中心的編集能力」を捨てて 現実を直視せよ

—— 現在の社会について現代文を教えられている林先生は、生徒にどのような話をされているのですか。

林 社会の変化は恐ろしいほど速く、競争はもつと過酷になっていくと思います。例えば、

一〇〜二〇年後には日本人の仕事の多くが人工知能(AI)に代替されて、無くなるだろうという研究もあります。僕は若い人に「ほどほどで生きるのが、ものすごく難しい世の中になるよ」と伝えていくんです。

—— どういう能力を持っていたら、将来なくならない仕事に就けるか。その研究では、抽象的な概念を整理・創出する能力や、他者と交渉・折衝する能力が要求される仕事はなくなると言われています。この研究が正しいとするならば、どちらかの能力で勝負できるようにって、生活できるようならうという話をしています。

—— 若い人の反応はどうですか。

林 深刻に受け止めています。この仕事も、あの仕事も消える、これからの時代は、貧困層と一部の大金持ちの二極化が進んでいきかねないと話すと、静まり返りますね。

—— 現実社会はシビアな競争社会だという危機感を若い人たちに持つてもらわないとなりません。ちなみに僕が東進ハイスクールに採用された二十数年前、現代文の講師は一〇〇人程度いましたが、今は五人しか残っていません。リストラ率九五パーセントというシビアな世界を、僕は常に危機感を抱いてくぐってきました。

—— そんなシビアな世界かつお先真つ暗な産業であることを理解せずに、「予備校講師になりたい」と志望する若い人がいます。

—— 少子化の進行で、業界全体が構造不況に直面していますね。

林 日本の一八歳人口は二〇一八



年までに一〇万人減ります。大学進学率が五割程度ですので、大学受験人口は五万人減ることになります。一学年一〇〇〇人の大学が五〇校も不要になる。さらに今後、推薦入試も増えるでしょう。予備校講師の志望者に「将来、予備校は不要になるかもしれないけれども、この業界に本当に入りたいの？」と聞いたことがあります。そうした「そんなに大変なんですか」と自分に都合の悪いことは見ていないんです。

僕はこれを「自己中心的編集能力」と命名しています。自分に都合の良い世界・情報だけを編集し、勝手に何とかなると思いつく。先を見据えて動くことができる。そんな人が案外多いですよ。

——世の中の動きを自分の将来に引きつけて考える力も、これから必要になりますね。

林 若い人は「ここで働きたい」と思ったら、その業界の過去一〇年を徹底的に調べてみるべきです。これまでどういう変化をたどってきたかを調べ、これから先はどうなっていくかを考えてみる。物事を過去から現在へ、現在から未来への流れで捉えることが大事です。

「金融」を知らないと競争社会で不利になる

——林先生にとってのお金の意義、お金との向き合い方を教えてください。ご著書では「お金は使い方が難しい」と書いていらっしゃると思います。もともと、今の林先生は忙し過ぎてお金を使う暇がないと思えますが、いかがでしょうか。

林 それが実情ですけれども、昔から物欲がなく、物欲もないからお金はそんなになくていいと若い頃は思っていました。ただし僕はバブルの時代を経

歴史的に捉えてみて、働きたい業界に明るい未来が見えないかもしれません。どうするか。そこで「やりたいこと」にこだわらず、周囲と比べて自分がうまくできる、勝てる場所を探すことも必要です。社会が変わっていくときには、新しい仕事も生まれます。「これは勝てる」という場所を見つけてしまえば、そこから人生が大きく開けると思います。

—— 林先生は忙し過ぎてお金を使う暇がないと思えますが、いかがでしょうか。

林 それを実情ですけれども、昔から物欲がなく、物欲もないからお金はそんなになくていいと若い頃は思っていました。ただし僕はバブルの時代を経験したから、そう思えたんです。バブルの時代は何となく、それなりに稼げた時代でしたから。しかし、前に述べたように先々多くの仕事が無くなっていくので、そこそこの生活を維持するお金を稼ぐことすら難しい時代になると思います。僕は、お金が無いなら無いで何とかなるといふ人生を送ってきました。しかし、お金の無さにも限度がありますよ。

林 お金とは、何かの目的のため

に使う「手段」です。しかし、お金がないと、つまらないことで争いになる。お金だけで幸せにはなれないけれど、お金の防げる不幸はありますよね。

——金融教育の必要性については、どう考えていらっしゃるでしょうか。お金の貯蓄の方法ではなく、社会を生き抜く一つの武器として、お金に関する知恵が必要であると理解されたら、教育現場も、若者たちも「金融教育」にさらに真剣になると思いますがいかがでしょうか。

林 金融教育は絶対必要です。高校生の段階で、海外のようにお金をめぐる実践的な教育を始めていいと思います。先に述べたような「みんな一緒」ではなく、現実には競争を避けることが不可能であり、そうした競争の中を生きていく必須の知識、という切迫感が生徒の側にあれば、金融教育は広まり、かつ効果的に行われると思います。

—— 本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。

聞き手／情報サービス局長(取材当時・高橋 經一)